

地元堆肥使い混合肥料

長野県のJA佐久浅間は、JAが扱う地元の堆肥に化学肥料を混ぜたペレット型の指定混合肥料「望ちゃん」を発売した。原料が高騰する化学肥料の量を抑えコストを下げる。さらに地域の土壌の特性に合わせて成分を調整した。ペレット型のため、散布作業の省力化になるのも特徴だ。製造会社をJAに紹介したJA全農長野によると、JA独自の堆肥を使った指定混合肥料は全国初という。

国際的な肥料原料の高騰が続いている。コスト減や環境保全に向けて、堆肥など地域資源を活用することが課題となっている。

「望ちゃん」は4月下旬に発売。JA管内の佐久市から出る牛ふんがベースの堆肥「もちづき有機」を3割使用。鶏ふんや米ぬかなども1割入れ、化学肥料の量を6割に減らした。JA生産資材課の荻原雅彦課長は「化学肥料の量を抑えたことで、原料のコストが上がっても価格の上げ幅が少ない」とみる。

施肥設計では、地域の土壌の特性も反映。営農指導員の意見を聞き、管内の土壌に合わせてリン酸とカリの量を減らした。

これらの工夫で1袋(20

長野・JA佐久浅間が発売



※当たりの価格は1998円(9日時点の店頭価格)を実現。これは、JA資材店で扱う大口ロットの既製指定混合肥料(堆肥と化学肥料を配合)と、ほぼ同価格だ。堆肥と化学肥料を1粒のペレットにまとめることで、散布時間の短縮も見込む。

高騰下コスト減 土壌特性も反映

土壌や作型などによるが、10㍓当たり60〜160㍓[※]を施肥する。

JAが進める生産資材新商材開発プロジェクトの一環。2022年度は15000袋を販売し、26年度は8000袋の販売を目指す。

荻原課長は「資材の原料を地産地消にすることで、コスト低減だけでなく、地域資源を生かす環境に優しい農業の実践も後押ししたい」と話す。

発売した「望ちゃん」を紹介する荻原課長(長野県佐久市で)